

# 史遊会通信

No. 217 年  
平成 25 年 2月 7日 行  
2月発

事務局  
(03)  
3712-0651  
下山田方

例会のお知らせ

◎ 2月例会

日時 平成 25年 2月 27日 (水)  
午後 6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

講演 柴田弘武氏

テーマ 軽野・軽部地名考

自由執筆者 千坂精一・新井宏・  
鍋屋次郎の諸氏

◎ 3月例会

締切 2月末日

日時 平成 25年 3月 27日 (水)

午後 6時～8時

会場 目黒区民センター 7階  
社会教育館 第2研修室

講演 新井宏氏

テーマ 未定

自由執筆者 瀧澤中・柴田弘武・  
中山喬央の諸氏

締切 3月末日

私が一番最初にガーランドの名前を聞いたのは、今から十八年前、一九九五年六十一歳で明治大学に考古学専攻社会人学生として入学を許された時の大塚先生の講義であった。大塚先生が在外研究で大英博物館を訪れ、ガーランドコレクションの研究をなさり、須恵器一〇〇点を実測されたのは一九六七年の事だつたから、私が講義を受けた時はすでに三十年近く経っていたにもかかわらず、明快に熱弁を振るわれ、特に見瀬丸山古墳の横穴式石室の状況についてのお話のくだりは、いまだに耳の奥底にこびりついて忘れる事の出来ない思い出となっている。

昨年のNHKスペシャル「大英博物館」の

以後現地訪問の際にはコピーを持参するようにして効率の良い現地訪問を心がけるようになった。また二〇一一年三月刊行の『鉱山研究』に「釜石鉱山紀行」を投稿したさいは、『全国別所地名事典』掲載の蘇武氏の記事により、大きなヒントを得ることができた。一方、諸橋奏さんからは平成二十年三月、私が「三角縁神獣鏡の新しい見方」と言う題名で史遊会で拙い講演をしたさい、ブルガリア・ヴァルナ遺跡の世界最古の銅鉱石採掘と冶金にかかる資料を送っていただき、そのフォローにしばらくサンシャインビルとICUの近くにあるオリエント学会図書館・博物館に通つたのも、今は楽しい思い出となつている。

このような史遊会メンバー各位のアドバイスのお蔭で、最近は私自身の情報発信量も増えているようだ。様々な方々から何か問題が起つると、偶然それに対する最適な情報提供を受けることが多くなつた。

本日の発表も飯田健一の「もち鉄について」は鉱山研究会の小野崎敏氏から、佐藤庄吉の『深谷鍛冶遺跡調査報告書』は白石市芸員、日下和寿氏から、つい最近それぞれ提供を受けたものである。

本日発表の最大テーマはトムセンの三時代法に変わる四時代法の提案である。

すなわち人類の文化は石器時代・青銅器時代・初期鉄器時代・初期鉄器青銅器併用時代・十五世紀以降の後期鉄器時代と変化する、いいかえれば金属文化は銅ではなく鉄で始まつたとするものである。

これについてイギリスの冶金家ガーランドは「第一、木炭の火で鉱石から可鍛鉄を製するより簡単な行程がないこと。第二、鉄の還元に要する熱度が七百乃至八百熱量もあればよいのに、銅を要するのは千百熱量よりもすぐなくないこと。そのうえ、鞴も送風装置も不要なのである。鉄の場合は銅のように溶解を必要としない。この金属は、鍛えられる

鎔けない塊として得られるもので、道具や武器を作る為には槌で叩くだけでよい。」と述べ、ドイツの技術史家ベックも「銅を酸化鉱から得る為には約1100°Cの溶融点以上まで加熱しなければならない。これに反し鉄は約700°Cで鉱石から分離する事が可能で、還元された鉄は溶解前にワックス状となり個々の部分が容易に粘着し合い、あるいは鍛接され塊を作る性質を持っている」と述べて

いる。

この説を実験考古学的な行動で裏付けした飯田賢一の研究と、考古学の発掘成果で示した佐藤庄吉の両研究実績は、日本列島の金属文化、すなわち前者が鉄文化の発生が北国において、後者はその時期が縄文時代であることを明らかにした。

これらは世界の考古学研究史上に一石を投ずることになるのみならず、日本列島の現在に繋がる文化の伝播にも再考をうながす事となると愚考する。

本件は鉛同位体比新理論による日本列島鉱山開発の真相、玉文化の発生、縄文時代の資源利用研究等によつても徐々に解明されていくことになると信じて疑わない。

又ガーランドが提唱した天皇陵に対する見解は傾聴に値するものであり、彼の業績を明確に紹介したのは濱田青陵であつた。

自由執筆

## 世宗大王と足利義満

隆 恵

前回（No. 201）は、李氏朝鮮王朝と足利幕府の類似性を述べた。その類似性とは、王権や将軍職の財政基盤の脆弱性に起因して、王や将軍が重臣や有力守護大名の傀儡と化し、その生死までもが彼ら手中にあつたと述べた。

今回はその権勢の絶頂期とも言える第四代王の世宗大王と第三代将軍の足利義満もよく似た境遇にあつた事に触れたい。

世宗大王（一三九七年～一四五〇年）は、王朝開祖の太祖の孫に当たり、父太宗の五男ながら二十才で即位する。即位した時は、隣国の中では統一王朝の明の最強時代の第三代永楽帝の末期に当り、一方隣国の日本は南北朝合体を成し遂げた第三代義満の息子の第四代義持の時代に当る。

当時の朝鮮を巡る國際情勢は、大国明が最大の版図を誇った最盛期であり、その明でもその略奪に辟易していた倭寇が、朝鮮でも狼藉を働くなど、正に外患の時代であった。即

ち、北方は明の脅威と明の膨張による北方民族の女真族の南下があり、一方南方の沿岸部は倭寇の略奪と、国土防衛が緊急事であつた。世宗大王は、外敵の駆逐に一定の成果を上げて国土を確保し、民族の独立性には不可欠な固有の言語（現在のハングル語）を創作させるなど、建国を完成させた英雄と評価されている。

一方足利義満（一三五八年～一四〇八年）は、開幕者の尊氏の孫に当たり父義詮の庶子ながら十才で即位する。即位時は有力大名の細川氏の後ろ盾を得、その後は斯波氏や畠山氏の勢力を巧みに拮抗させつつ、将軍職の権威を高める。その財源は都の通行税や物品の流通税を独占し、直属の武士団の組成も行い、権力の裏付けとした。また、死の数年前には、念願の明との交易（勘合貿易）にも成功し、明國からは「日本国王」の称号（明の皇帝から日本国王に冊封されると言う屈辱）を得て、莫大な富を得る。

こうして得た莫大な富をもつて壮大な北山第と金閣寺で有名な鹿苑寺を建立する。その一方、開幕來の国内を二分した内戦状態の南北朝を統一し、不服従の九州探題今川貞世や西國の大名大内義弘を討伐して、西日本の

制圧に成功する。彼は、傀儡將軍が大半の足利幕府では突出した実力者であり、平安時代末期の平清盛を髣髴とさせるものがある。

このように朝鮮の世宗とわが国の義満は、約四十年の年月差はあるものの、ほぼ同時期に燐然と君臨したわけだが、この二人の死後には後継者を巡つて同じような悲劇が繰り返される。

即ち、世宗の死後は長男の文宗が即位するが僅か二年で病死し、その子の端宗が十二才で即位するも僅か三年後には世宗の次男で叔父に当る世祖に王位を簫奪され、その四年後には配流先で暗殺される。

王位を簫奪した世祖は、父世宗のような王権の回復に努めるが、在位十三年で病死、その後継を次男の睿宗に託すも僅か一年で病死、その後継として世祖の早世した世子の遺児成宗が有力重臣の後援の下即位をし、やつと短命王位が解消される。

世宗は平和的な王位の継承を願つて「長子相続」の法を定めるが、長男の思わぬ早期病死と、事もあろうに次男の世祖が世宗の幼年の嫡孫の王位を簫奪して、僅か五年で世宗の夢は霧散してしまう。

一方の足利義満は、息子の義持に譲位して

太政大臣になり病死するが、義持は生前から実弟の義嗣を偏愛した父義満と不仲であったためか、父建立の北山第も鹿苑寺を除いて破却を行い、父建立の北山第も鹿苑寺を除いて破却したという。義持は在位三十年の長期政権となるが、実弟義嗣を反乱の罪で殺害し、関東を中心全国的に政情が不安定化する。こうして緊迫した状況のなか子の義量に譲位するも僅か二年で早世、その後継の将軍の選任には無関心だったので、実弟の義教がくじ引きで即位したとなつて、私は、義持が推挙したい人物に有力大名の賛同が得られず、義持が投げ出したと言つたのが真相ではないかと思う。要するに将軍義持にはその権威がなかつたのである。この義教は、父義満のようない将軍の権力回復を目指したがために、赤松満祐に在位十二年で暗殺される。その後継には、義教の子の義勝が人才で即位するもまた一年で病死、その後に銀閣寺建立で有名な義教の子即ち義満の孫の義政が即位する。

義政は在位こそ長いが応仁の乱が起きてからは戦国時代が到来し、名目だけの将軍であった。

世宗と義満は、一代で政権の磐石化に成功する稀有の英雄であるが、長期の王朝や幕府

ではあるも燐然と輝く最盛期はたかだか二十年から三十年間の極めて短い期間に過ぎず、英雄が死するやその子孫達は早世するか、同族や配下の者達に殺されるか、生き残つてもお飾り人形にされてしまう。

世宗と義満に限らず、これが権力者達の宿命と古今東西の歴史は教えているように思う。

自由執筆  
兼農サラリーマン

三戸岡道夫

先日、私はある人から、

「いま兼農サラリーマンが増えている」

「これからは兼農サラリーマンの時代ですよ」

ということを聞いて、驚いた。兼農サラリーマンとは、はじめて聞く言葉である。

いうのが一口に言うと日本の農業の現状であり、心配であり、大問題である。

しかし、それと反対にサラリーマンでも農業に関心を持ち、サラリーマンをやりながら農業をやる人が最近は増えており、それが「兼農サラリーマン」というのである。そして将来は、「兼業農家」に代わって、「兼農サラリーマン」が主になっていくことになる。それは単に言葉だけでなく、それを実行している人が出始め、そして日本各地に増加しはじめているというのである。

これまで日曜園芸とか、家庭菜園とか、貸し農園とか、レジャーナー農地とかいつっていたものが、一段と本格化し、定着してきたとでも言えばよからうか。しかし兼農サラリーマンはそのような人達だけではなく、将来の日本の農業の危機を憂えるサラリーマンが、意識的に農業へも手を伸ばすという、心強い動きも大きな力になつてゐるのである。

日本の農業は、農地法とかいろいろ規則があつて、農業以外の者が農業をするのに、いろいろ制約が多く、やり難い点が多い。それを政府は単に金銭のバラまき政策で現状を糊塗しているが、政治、経済のグローバル化の時代、政府としてもこの辺のことは、早急に

改正が行われていくことと思われる。

いま日本の眼の前にはTPP問題が突きつけられているが、TPPを機会に日本は農業の大改革に早急に手をつけるべきである。

今後の日本の農業は産業と同じように、大企業と中小企業となっていくのであるまいか。農業の大企業とは、たとえば各県がそれぞれ県営の農業株式会社を作り、そこで各県の農業を専属的に行うのである。従ってそれは大規模農業となっていく。トラクターで耕すとか、ヘリコプターで種をまくとか、刈込機で刈つていいくなど、アメリカ式の農業のように大規模機械化農業となつていい、その

中へ現在の農業を吸収していくと同時に、若者の新しい職場を作っていくのである。

それと並行して、大規模農業では出来ないもの、手の届かないもの、また小規模分散の方が適しているものについては、兼農サラリーマン方式でやつていくのである。

日本の農業は世界で一番優れた農地と農業技術、そして勤勉な農業労働者を持った国である。すなわち、世界で一番すぐれた農業国なのである。

一方、地球上では今後急速に人口が増加し、食糧難になる。だから日本の農産物が生産過剰になれば、世界へ輸出すればいいわけなのである。

自由執筆

### 武則天の光と影（I）

中込 勝則

武則天（＝武后）は、前漢の呂后・清の西太后とならんで三大悪女といわれ、評判は芳しいものではない。地方高官の家に生まれ、成りあがり的に唐朝第三代皇帝高宗の皇后にまでのぼり、やがては中国史上唯一の女性皇帝となつて、約半世紀も大中国を支配した。

生まれつきの美貌と才気に恵まれて、政治力にたけ、上りつめる過程では情報網をはり、権力をにぎりまもるために手段をえらばず、わが子をふくめて殺した数は数知れず、老年にいたつてもそのセックスピワーは壮んで若い男妾をかかえて、ひとことでいえば残忍・悪辣・淫蕩であつたとつたえられる。

しかし、世上につたえられるだけの女性であつたのであるうか。彼女は、最近、見直されつたり、一面では偉大な女性であつたと

である。大規模農業になるのでコストダウンになり、値段としても輸出可能になる。

今後の日本の経済は、自動車や機械などの産業輸出だけでなく、農産物の輸出国としても発展していくのであるまい。

冒頭の、私が話を聞いた「ある人」とは、神奈川県南足柄市の古屋富雄という、私が、「花の金次郎」と呼んでいる人である。これまで南足柄市に「花いっぱい運動」を開催してきた古屋さんは、いま「兼農サラリーマン」活動に突入しているのである。日本の農業、いや世界の農業の最先端を走っている人ではあるまい。

の評価が高まつていて、その側面にスポットを当ててみたい。

### 1、生いたち

武后的父武士彟（ぶしき）は、隨

前、北周時代に太原ちかくの并州の農村に生れ、その地の材木商且つ下級武士階級の有力者だった。隨政権が末期的症状を呈していたころ、この地に派遣されてきた李淵（のちに唐の初代皇帝）とよしみを通じ、やがて、唐

が決起したときにその側近として、各地の都督をへて、やがて荊州大都督・從二品になつた。先妻をなくしていた彼は、この頃後妻をめとり、娘三人をもうけた。この次女、本名照がのちの武后である。ところが父が死ぬや先妻の子の兄たちは、後妻とその娘たちをいじめた。武后的、敵をどこまでも追いつめ平然と殺す残忍さ・勝気さはこの幼女時代に培われたという人もいる。彼女の没年は七〇五年だが、生年ははつきりしていない。多分六二四、五年といわれる。父の任地だった四川省広元とする説が有力だ。

唐朝成立後、政権内部で李淵の後継者争いがおき、次男の李世民が、長男の建成らを玄武門の変で倒して、第二代皇帝に就く。これが太宗である。

太宗は、四十歳台の男盛りで愛妻の長孫氏（兄は長孫無忌）を亡くした後、後宮を整えようとして高官の娘たちから選抜した。武照もその一人だった。彼女は十四、五歳のころ選ばれて宮中に登り「才人」となった。太宗には妃が四人、嬪・才人・捷女・美人がそれぞれ九人づつ、さらに宝林・御女・采女が各九人づついて妍を競っていた。

武照はかならずしも太宗のお手がついたわ

けではないようである。年もだいぶ離れていたし、太宗はむしろ彼女の利発さや詩・文章・書などの才能を買って秘書的に使い、太宗が高句麗討伐に洛陽に移つた時も彼女を伴つていたという。そして太宗が亡くなるまでお側に仕えた。

## 2、太宗の後継者争い

太宗には、長孫皇后との間の皇太子李承乾・李泰・李治の三人の他十四人の男子がいたが、皇太子李承乾は代わつて、突厥風な言葉や生活を好んでパオに寝起きし、羊の生肉を切り裂いては食らうという風だった。兵を率いて突厥可汗にまみえてみたいなどといつては、大唐帝国の跡継ぎにはできない。

これをみた次男の李泰側は皇太子の廢位を目論んで、策謀や挑発を行い、これに乗つた承乾は、李泰の暗殺を試みて失敗し、はては太宗の暗殺を企てた。

これによつて彼は皇太子を廢され、四川省に流されて死んだ。重臣たちは、喧嘩両成敗を進言して、李泰も罪を問われ、僻地に流されて幽閉され、後に死んだ。

こうして三男の李治が皇太子となつた。これがのちの高宗である。彼は優柔不斷の

性格で後継者にふさわしいとは言えなかつたが、長孫無忌など重臣たちにしてみれば操りやすいとしたのかもしれない。

## 3、武后、高宗の後宮へ。そして暗闘

太宗はやがて病の床につき没した。李治は太宗の病床に付き添つて看病するうちに、武照を見初めたが、太宗在世中は手は出せない。太宗の死後、彼女は、子供を産んでいない女官の宮廷の慣例によつて、西安の感業寺（この寺は今はどこにあつたのかもわからぬようだ）に送られ尼になつた。高宗となつた李治は、太宗の忌日ごとに感業寺に詣では、これを機会にひとめぼれしていた彼女との関係が始まつた。彼女は約三年位を尼としてすごしたが、太宗の死後三年目に高宗の子を産んだ。そして後宮に迎えられた。

高宗にはすでに王皇后や愛妃の蕭氏がいた。王皇后には子供がなく、蕭氏には将来を嘱望されている皇子がいた。王皇后はなんとか蕭氏を追い出そうとして武照と手を組んだ。武照は高宗よりも数歳年上で、手練手管を使つて高宗の愛を勝ち得ていき、ついに蕭氏は遠ざけられた。王皇后は蕭氏を遠ざけることに成功したが、利用したつもりの武照がライバルになつてしまつた。今度は王皇后と

蕭氏が手を組んで武照を追い出そうとする。

王皇后は太宗が特に選んで高宗の皇后にした女性で、勢力を張っていたので、武照には手ごわい相手である。武照は昭儀ではあったが、王皇后と蕭妃からは断然地位が低い。

しかし、武照はかつて太宗の秘書的立場にいたから、宮廷内のことを探り尽くしている。女官たちや若手の官僚を味方に引き入れ、暗闘が始まった。

こうしたこと、事件は起つた。

武照が女兒を産んだとき、王皇后が見舞いにやつてきた。王皇后が女兒の寝ている部屋に入つてゐるとき、武照はしばらく身を隠した。そして皇后が部屋を出てしばらくして武照が部屋に戻ると、女兒は死んでいた。彼女は「だれが殺したのか」と泣き叫んだ。部屋に入ったのは皇后だけだったため、皇后は女兒殺しの犯人扱いされた。これは武照がわが子を殺し、皇后に罪をなすりつけた芝居だったのである。これによつて、王皇后の立場はわるくなつたが、皇后の地位にどどまつた。

その後、宮廷内でいくつかの事件もあつた。そして皇后が女兒を産んだ長子李弘が皇太子にたてられた。許敬宗・李義府などの策謀によつて、武照が皇后になることに反対した長孫無忌や褚遂良も、やがて僻地に流されてその地で亡くなつた。

#### 4、武后的「垂簾の政」

武后が皇后になつたころ、高宗は風眩・風疾という頭痛やめまいに悩まされており、政治は武后に任せきりとなつていて。武后は宮廷内を知り尽くしたその才気によつて、政治手腕を發揮していく。朝廷内において彼女はの女官たちからだつた。

こうして、子も無かつた王皇后の立場はますます不利となつて、ついに六五五年、皇后の地位を廃され、同時に蕭氏もその地位を失い、武照はついに皇后となつた。武后は、彼女たちを生かしておいては、いつ逆転されるかもしれない、二人の手足を切り取つて酒がために投げ込んだという。漢の呂后のやつたこととおなじで、女の怨念はすさまじい。

これは王皇后と武照との争いであるが、裏には旧主流派と新興官僚グループの争いも絡んでいた。旧派の代表は、太宗時代からの長孫無忌や褚遂良で、新興勢力の代表は許敬宗・李義府などだつた。

その後、宮廷内部でいくつかの事件もあり、皇太子李忠は廃され、武后的生んだ長子李弘が皇太子にたてられた。許敬宗・李義府などの策謀によつて、武照が皇后になることに反対した長孫無忌や褚遂良も、やがて僻地に流されてその地で亡くなつた。

高宗の後に下がつた簾の裏側に座つて高宗に意見を伝えていたといふ。これを「垂簾の政」といった。

この頃から朝鮮半島の高句麗との間の緊張が高まつて、本格的な戦争が始まつて、唐はまず百濟に侵攻し、百濟を滅ぼしてその北の新羅と連合して高句麗を攻める作戦をとつた。

日本は百濟救済のため出兵したが、六六三年、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗し撤退し、唐の追撃におびえて大宰府防衛のため水城を張り巡らしたのもこのころである。

唐の実力を見た日本は、やがて唐に学ぶため遣唐使を派遣してその文化文物を輸入するようになる。平城京の建設や律令制度の整備など、唐を見習つた。

唐の朝廷は高句麗との戦争上、首都長安は遠すぎる所以朝廷勢力は実質的に東の副都洛阳に移つていつた。六六八年ついに平壤を陥落させて高句麗征伐は完了した。

武后はこのころ盛んに朝廷内部に勢力を浸透させていつたが、武后はすでに四十歳になつていたこともあって、こうした動きは高宗にとつて疎ましい存在となり、高宗のお気に入りは武后的姉の韓国夫人やその娘の魏国夫人で、高宗はついに武后的廢位を考え、宰

相の上官儀らと計った。ところが、情報通の

武后はこれをいち早く知つて激怒し、許敬宗に肅清を命じて、上官儀一派を処刑した。この事件以後、武后は周囲を腹心で固め、独裁体制へと進んでいく。

高宗への態度もアドバイスから指示に変る。自分に反対する者は容赦なく追放したり、殺したりした。皇太子に立てた自分の生んだ長男李弘をも武後の反対派に担がれないと見るや、これも毒殺させたとみられる。

彼女の独裁体制は上官儀の失脚（六六四年）から七〇五年の彼女の皇帝退位まで四十年間余りつづいた。李弘の死後、皇太子は次男の李賢になつたが、自分の母は韓国夫人ではないかとの噂に悩み、その末に謀反の疑いで位を廢され、四川省に流されて死んだ。そのあとは三男の李顯（=後の中宗）が皇太子となつた。

六八三年に、高宗と武后は洛陽近くの嵩山で封禅の儀を行つた。封禅なら泰山で行うのが普通だが、高宗の病がひどく山東省の泰山までは遠すぎたのである。高宗はこの時の無理で病状が悪化し、この年末に崩じた。高宗五十六歳、武后は六十歳を超えていた。

※事務局だより

柴田弘武

▼講演の骨子  
『常陸國風土記』に「輕野から東の大海上の浜辺に、流れ着いた大船があつて、その長さは十五丈、内の幅は一丈余りである。朽ち碎かれて砂に埋もれ、今もなお残っている。天智天皇の世に、国土を探し求めつかわそうとして、陸奥国石城の船大工に大船を作らせたところ、ここまで来て岸に着き、ただちに壊れたという。」（植垣節也訳）とある。また応神紀に伊豆国に船を作らせ『枯野』と名付けた話があり、そこは田方郡狩野郷（軽野神社がある）のことだとされている。これらの挿話から茂在寅男氏は「軽野・狩野・刈野の地名は造船または船材伐出しの地に由来する」という仮説を提起した。そして澤田文雄氏や谷川健一氏はこれを支持している。

私はそれに反対し、「カル・カリ」地名は産鉄地に付けられたものという反論を行いたい。

25年度 講 演 者		史 遊 会 通 信				
	講 師	No.	原稿締切	発行月	講演要旨	自由執筆者
1月23日	中山 喬央	216	12月末	1月	森下 征二	平山・小田・鯨
2月27日	柴田 弘武	217	1月末	2月	中山 喬央	三戸岡・隆・中込
3月27日	新井 宏	218	2月末	3月	柴田 弘武	千坂・新井・鍋屋
4月24日	中込 勝則	219	3月末	4月	新井 宏	柴田・中山
5月 日	三戸岡道夫	220	4月末	5月	中込 勝則	太田・森下・佐藤
6月 日	千坂 精一	221	5月末	6月	三戸岡道夫	村上・漆原・平山
7月 日	太田 精一	222	6月末	7月	精一	小田・鯨・三戸岡
8月	休会	223	8月中	9月	太田	隆・中込・千坂
9月 日	村上 邦治	224	9月末	10月	村上 邦治	新井・柴田・滝沢
10月 日	漆原 直子	225	10月末	11月	原直子	鍋屋・中山・太田
11月 日	討論会	226	11月末	12月	今年感動した三冊の本	
12月 日	忘年会					